

へ武將俗人などの頂相風の肖像畫を生じたが、本圖は形體迄も全く頂相によつた未だ僧籍に入らぬ居士の像として最も古い一例であり、加ふるに保存極めて良く、珍重すべき作例である。

## 一二 伊孚九筆山水圖 三重 村井市平氏藏

絹本淡彩 挂幅装 縦一〇四・七釐(三尺四寸六分)  
横四三・一釐(二尺四寸二分)

本邦南畫發祥期に屢長崎に來舶して大雅以下のちの文人畫家に敬重せられたといふ清人伊孚九の山水圖である。畫面左半に樹木生ふる山嶺を重ね、右半纔かに湖と河とを覗かせ、屋敷軒、舟三艘を配してこれに人物二三を點する。淡墨の上に極めて淡い藍、草汁、赭等の色を重ね、前景及び中景左手の潤葉樹葉に粉白の短線を加へ、なほ處々に濃墨の筆を點してゐる。但し一再ならず洗滌せられたものと見え、墨氣も幾分失せてゐるから、當初はもつと清鮮であつたらうと思はれる。これ亦一種の高遠山水と謂ふべきであらうが、所謂殘山剩水の趣が無いでもない。山の貌の高峻なるにも拘らず一體に鋭い所のない穩靜澹泊な感じである。竹田の屠赤瑣錄に介石の言として記してゐるところに依れば、伊孚九は董北苑と黃子久とを合し、雲林の趣を以て作る、といふことであ

伊孚九筆山水圖款印(原寸)

るが、董源は兎も角として大癡らしいところは無いでもない。本幅の如きは曾て本誌第九十に紹介した「離合山水圖」やよくある渴筆風の便面小品に比すれば一段卓れた孚九山水中の尤作であらうが、皴法にも樹法にも格別のことなく、筆法に力があるといふわけでもない。ただその法に囚はれず格に入らぬ畫き方は乾隆以後の清朝文人畫に一般の風ながら、その格法を無視した印象風のところが、卻つて當時專家の詰屈な畫法に慚らなかつた一部の本邦畫人に迎へられて、この一商賈の餘技をして日本南畫の發祥釀成に寄與するところ尠からぬものにもし、今日の眼から見れば廻かにこの人の上にある大雅などにも伊孚九推重の念を抱かせることにもなつたのであらう

伊孚九の傳は詳かでないが、當時日支の間を往復してゐた清商の子で吳興の人、名は海、孚九は字、莘野、匯川、也堂、桴鳩等と號し、また雲水伊人と稱した。享保五年二月父と共に甫めて長崎に來航し、以後寶曆初年頃まで彼我の間を往來したらしい。沈南蘋と共に江戸中期の畫壇に及ぼした影響は大きく、後來の張秋谷、費晴湖、江稼圃と共に來舶清人の四大家などと稱せられたが、元來が商人で學識畫才ともにそれ程高いものとは思はれない。しかし偶々支那趣味流行の時に當り、文人畫勃興の時期に際しての彼の貢獻は、その作品の實質以上に歴史的意義を有するといふべきであらう。

この幅「乙丑夏伊孚九」と署し「孚」九の朱文方印に、「五日一山十日一水」の游印一顆を鈴する。乙丑は延享二年(高宗乾隆十年)に當り、此年長崎にあつたか否かは明らかでないが、桑嗣燦の玉洲畫趣に、日本での作には字を署し、本國での作には名を識するのは非禮だと憤慨してゐるところより見ればこれ亦我が國來朝中の作か。